

令和元年6月20日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K12907

研究課題名(和文) 複雑性理論を基盤とした学習者の言語能力と動機付けの変化に関する縦断的調査

研究課題名(英文) A Longitudinal Study of Proficiency and Motivation based upon Dynamic Systems Theory

研究代表者

西田 理恵子 (Nishida, Rieko)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・准教授

研究者番号：90624289

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校5年生から中学校3年生にかけての5年間に於いて10回の言語運用能力テストと質問紙調査を実施し、生徒の言語運用能力と動機づけ・情意に関わる変化の傾向を捉えた。全体傾向においては、言語運用能力は、各年度の7月と2月を比較すると上昇する傾向にあり、動機づけや情意についても、維持するか、あるいは、ゆるやかな上昇を示されている。この背景には、小学校から中学校にかけてのカリキュラム開発において、生徒の発達段階を考慮したタスクやプロジェクトが積極的に組み込まれていたと考えられる。さらに、5年間を通して、生徒の社会的文脈が言語運用力や動機づけや情意面に影響があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、小学校段階で実証研究を行った児童を中学校段階でも追跡調査をし、言語運用能力は英検で測定し、動機づけと情意に関して質問紙を実施することであった。言語運用能力については各年度の7月と2月を比較すると2月時点で上昇する傾向にあり、5年間を通して動機づけや情意面を測定した結果、維持するか、あるいは、ゆるやかな上昇を示された。これは、カリキュラム開発や指導案開発において、生徒の発達段階に応じたプロジェクト型授業が組み込まれていたことや、日々の指導案においても、教師が様々なタスクやiPadを使用した補助教材を使用していたことによって言語運用能力や情意面が上昇した可能性が示された。

研究成果の概要(英文)：The study was a five-year longitudinal study to see Japanese elementary and secondary students' proficiency and motivational changes throughout the course in the use of the mixed method of quantitative and qualitative design. In July 2012 and February 2017, proficiency tests and questionnaires were administered to 35 students, aged between 10 and 15 years old. Of these, 13 students were excluded from the study due to absentees. The proficiency tests and the questionnaires were administered to students every half year totaling 10 times within 5 years. Descriptive statistics showed increasing tendencies in students' proficiency, and also perceived autonomy, perceived competency, willingness to communicate in L2, and Can-Do showed increasing tendencies. All students were analyzed independently, and found out that they all showed different patterns of motivational shifts and dynamics, and some showed negative patterns of motivational shifts when they were at the secondary school.

研究分野：英語教育

キーワード：縦断調査 小学校英語 中学生 動機づけ 情意 言語運用能力

1. 研究開始当初の背景

1960年以降、第二言語習得分野において動機付けの研究がカナダの研究者らによって盛んに行われてきているが、近年の動機付け傾向として1990年代以降は自己決定理論(内発的動機付け・外発的動機付け)を基盤とした教育心理学的理論が取り入れられるようになり、2000年代以降には可能自己(理想自己・義務自己)や時間軸を取り入れたプロセスに関する研究(Process-orientated approach)に関する研究が行われつつある。今後の研究においては、複雑系理論(Dynamic System Theory)を基盤とし、経年データを用いた個人内変化の傾向を基盤とし、自己に焦点を当て、文脈の中における変化のプロセスにおける複数の要因が影響を与えある現象と複雑な全体システムの構造を説明する研究が注目を集めている。複雑系理論を基盤とした研究では、学習者の心理的側面に焦点を当てつつも、情意的・言語的・文脈内での関係を説明し、複数の要因を含めた全体のシステムとしての事象を描写し、構造の変化や変化の過程の分岐点を説明していく。本研究においては、経年変化に関する学習者の変化とプロセスを量的・質的研究方法を用いた混合計画をもって行い、マクロとミクロな視点に基づいた実証研究(混合計画)を用いて学習者の変化の傾向を精緻に分析することを目的としている。

2. 研究の目的

本研究は、科学研究費助成金の助成を受けた「小学校外国語活動における児童の動機づけと情意要因に関する縦断調査」(課題番号 24720256)の成果を更に発展させるものである。具体的には、小学校段階で実証研究を行った児童を中学校段階でも追跡調査をし、言語運用能力は英検で測定し、動機付けと情意的側面に関して質問紙を実施する。これまでの当該研究においては、縦断的調査報告、特に小学校～中学校にかけての実証研究は報告が乏しく、言語運用能力と情意的側面の関係性を捉えた研究は皆無に等しい。従って本研究では、5年間の変化の傾向を、多面的に可変的に実証研究方法を用いて捉え、教育現場におけるカリキュラム構築や適切な教育的介入を提言していく。

3. 研究の方法

本研究では、小学校から中学校にかけての5年間の長期的なデータを取り扱い、学習者の言語的・情意的側面を社会的文脈(社会・文化・学校・教室内)にあてはめながら解釈する。主に個人の変化や発達を捉える側面と、集団の変化や発達を探っていくことにある。従って、本研究では、小学校5年生～中学校3年生までの5年間の縦断的調査を用いて、学習者の言語運用能力と動機付けや情意に関する変化と変化の起こるプロセスを明らかにする。全体傾向と個人の特徴(マクロとミクロの視点から)の発達に関して、折衷方法(量的・質的研究方法)を用いて分析を行う。経年変化における動機付けや情意的側面の変化を量的調査(質問紙)と言語的側面を半年ごとに実施し、半年ごとの全体傾向・個人差傾向を統計分析にて解明し、自由記述と半構造化面接を実施して、学習者個人に焦点を当てて変化の様子の多様性を視覚的に捉え、総合的に考察する。

4. 研究成果

本研究においては、上記の先行研究の流れを受けて、以下の2つの研究課題を設定している。

研究課題 1: 小学校 5 年生から中学校 3 年生にかけての 5 年間に於ける生徒の言語運用能力, 内発的動機づけ, 自律性, 有能性, 関係性, L2WTC, 理想自己, Can-Do, 外国への関心についての変化の傾向の全体傾向を探る。

研究課題 2: 言語運用能力, 動機づけ, 情意に関する 5 年間の変化に関する個人の特徴を捉える。

4.1 調査対象者: 本研究の調査対象者は、公立小学校から公立中学校へ通う 35 名であった。そのうち 13 名は欠席の理由などから研究対象ではなくなったため、22 名が本調査の対象者である。

4.2 調査実施期間: 2012 年 4 月～2017 年 3 月にかけての 5 年間で、合計 10 回の質問紙調査と言語運用能力テストを行った。半年毎(7 月と 2 月)に調査を実施している。言語運用能力テストには、5 年生～6 年生段階では英検ジュニアの一部を使用し、中学校 1 年生段階では英検 5 級の一部を使用してリスニング力を測定し、中学校 2 年生～3 年生段階では英検プレースメントとテスト E を使用して測定している¹。

4.3 言語運用能力テストと質問紙: 小学校からの要望により、小学校 5 年生段階では、英検ジュニアを使用して 15 問のリスニングテストを実施した(2012 年 7 月, 2013 年 2 月, 2013 年 7 月, 2014 年 8 月)。中学校段階においては、中学校 1 年生では中学校側からの要望により、中学校 1 年生(2014 年 7 月, 2015 年 2 月)に、英検 5 級のリスニングテストを実施した。中学校 2 年生・3 年生段階においては、英検受託研究の助成金を受けたことで英検プレースメントを実施することが可能となり、中学校側からの要望により、中学校 2 年生(2015 年 7 月, 2016 年 2 月)にはプレースメントテスト E を実施し(ver.10)(点数配分 1100 点満点: Reading 550 点, Listening 550 点)、中学校 3 年生(2016 年 7 月, 2017 年 2 月)にも同様にプレースメントテスト E を実施した(ver.2.0)(点数配分 800 点満点: Reading 400 点, Listening: 400 点)。また、プレースメントテスト E 実施時には、3 種のテストがあり、同一レベルの実施ではあるものの異なるテストを実施している。質問紙調査については、内発的動機づけ, 自律性, 有能性, 関係性, コミュニケーションへの積極性, 言語や文化への関心, 理想自己に関する質問紙調査を実施した。

5. 分析結果: 結果として、全体傾向を比較すると、各学年の 7 月と 2 月を比較すると言語運用能力は上昇する傾向にあることが明らかになった。5 年間を通じた動機づけや情意面の変化については、Can-Do, コミュニケーションへの積極性が中学校 3 年生にかけて上昇する傾向にあることを明らかにした。次に、研究課題 2 である言語運用能力, 動機づけ, 情意に関する 5 年間の変化に関する個人の特徴を捉えるために、クラスター分析(ワード法・ユークリッド距離)を実施したところ、上位群(11 名)・下位群(11 名)に分類された。上位群の 11 名は、言語運用能力・動機づけ・情意要因が高い学習者群であり、下位群の 11 名は、低い学習者群であった。個人差の視点から 22 名全員の言語運用能力と動機づけ・情意要因について詳細に分析し、さらに自由記述と各自について教師からの半構造化面接を行っている。上位群の生徒については、上昇する傾向にあり、下位群の生徒については低下していく傾向にあった。生徒たちの自由記述、教師からの面接でも明らかになっているように、上位群では「英語が楽しい」「活動が楽しい」などの意見が見られた一方で、下位群では「英語が嫌い」「英語が楽しくない」「教師がいやだ」などの意見が見られえている。さらに教師からの半構造化面接でも明ら

かになっているように、低位群の生徒の中には、環境要因（学校・家庭）などの要因が英語学習に影響している可能性があるとの示唆を得ている。主に、学習困難・クラブ活動での問題の学校内での要因、さらに、離婚・両親の失業など家庭内での要因などの社会的要因が学力に影響している可能性があるとの示された。

6. 考察

本研究では、小学校5年生から中学校3年生にかけて、5年間において10回の言語運用能力テストと質問紙調査を実施し、生徒の言語運用能力と動機づけ・情意に関わる変化の傾向を捉えた。結果として、全体傾向においては、言語運用能力は、各年度の7月と2月を比較すると上昇する傾向にあり、動機づけや情意についても、5年間を通して維持するか、あるいは、ゆるやかな上昇をすることが示されている。これは、カリキュラム開発や指導案開発において、年間指導計画には、生徒の発達段階に応じたプロジェクト型授業（劇・絵本・プレゼンテーション）が組み込まれていたことや、日々の指導案においても、教師が様々なタスクやiPadを使用した補助教材を使用していたことによって言語運用能力や情意面が上昇した可能性が示唆される。小学校から中学校にかけてのカリキュラム開発においては、生徒の発達段階を考慮したタスクやプロジェクトが積極的に組み込まれていたといえる。さらに、5年間を通して、生徒の学校内環境の変化や家庭内での変化、社会経済的变化によってその言語運用力や英語学習意欲や情意面に対して影響があることが明らかになった。とくに、低位群に示された、言語運用能力が著しく低下した生徒については、家庭内での問題が大きく影響していたことがその後の半構造化面接で明らかになっている。このように学習者が行動を決定する意思や決意は、学習者の内的要因である学習への内発的関心や活動への価値に関りがあり、外的要因については、社会的文脈と考えられる両親や教師、重要な他者とのやりとりや経験、学習環境とされる教室内環境との社会的な文脈にも関りがあるとされる。そのため、縦断調査において学習者に言語運用能力や動機づけ・情意に関して変化の傾向が見られる場合は、学習者が持つ複雑な社会的文脈とされる外的要因を考慮する必要がある。学習者というシステムは、複雑系理論によれば、まわりの環境と相互影響をしようと考えられるため、英語学習時においても、学習者個人がもつ社会文化的環境や文脈を考慮し、柔軟な考え方を示す必要がある。

7. おわりに

本研究では、これまでに明らかにされていない小学校5年生から中学校3年生にかけての5年間の縦断調査における学習者の変化の傾向を全体傾向と個人の特徴（マクロとミクロの視点から）捉えた。調査対象者数には限界点があるものの、一定の示唆を示していると言えよう。縦断調査は、経年データを収集するため大規模な追跡調査を行うには困難を伴う。しかし、より多くの縦断調査を量的・質的方法を用いて精緻に分析し、学習者個人がもつ動機づけや情意面の多面性や可変性を捉え、実証的手法を用いて学習者の構造的変化の傾向を精緻に解明していくことが、今後も期待されよう。近年ますます英語教育が加速化する中で、本研究成果が当該研究分野において一石を投じることを願っている。

注:中学校1年生~3年生にかけては、3つの小学校が集まったため、当該研究対象者に加えて、2つの小学校から来た対象者についても調査を行った。本研究では、小学校5年生から調査を行っていた生徒を調査対象者としている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- 1) 西田理恵子 (2017). 中学校段階における学習者動機と言語能力に関する実証研究」公益財団法人日本英語検定協会 英語教育研究センター委託研究 調査報告書 . p.1-p.115.

〔学会発表〕(計21件)

- 1) Nishida, R. (2019). A longitudinal study of language proficiency and motivational changes for Japanese elementary and secondary school students in the Japanese EFL context. Poster Presentation. Hawaiian International Conference on Education. January 5-8. Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort. Honolulu.
- 2) Nishida, R. (2018). A three-year longitudinal study of proficiency, motivation, and affect in language learning in the Japanese EFL context. Applied Linguistic Association of Australia (ALAA). Nov.26-28. University of Wollongong, Australia.
- 3) 西田理恵子 (2018). 中学校段階における言語運用能力と情意面に関する実証研究 .全国英語教育学会 . 京都大会 . 龍谷大学 . 8月25日 .
- 4) 西田理恵子 (2018) . 小学校から中学校にかけての縦断調査 : 言語運用能力と情意面に焦点を置いて . 小学校英語教育学会 . 長崎大学 . 7月28日 .
- 5) 西田理恵子 (2018) . 質問紙の作り方 ! 小学校外国語活動における児童の動機づけと情意に焦点をあててワークショップ . 招待講義 . 小学校英語教育学会 . 神戸市外国語大学 . 神戸 . 7月29日 .
- 6) 西田理恵子 (2017) . 中学校段階における学習者動機と言語能力に関する実証研究 : 2年間の縦断調査 . 口頭発表 . 全国英語教育学会 第43回島根研究大会 . 島根大学 .
- 7) Nishida, R. (2016). A year-long study of motivational dynamics for Japanese secondary school students in language learning. University of Jyväskylä, Finland, August 24 - 27, 2016 . The European Second Language Acquisition (EuroSLA). Paper Presentation.
- 8) Nishida, R. (2016). A longitudinal study of listening and affect for young Japanese EFL learners. Paper presentation. Hawaiian International Conference on Education. Waikiki, Hawaii.
- 9) 西田理恵子 (2016) . 小学校外国語活動におけるプロジェクト型授業 : 理論と実践を通して . 言語教育エキスポ . シンポジウム . 招待講演 , 早稲田大学 .
- 10) 西田理恵子 (2016) . 小学校外国語活動における児童の情意を測定するために : 質問紙の作り方 . ワークショップ . 小学校英語教育学会 研究推進委員会主催 . 亜細亜大学 . 東京 . 招待講義 . 11月20日 .
- 11) 西田理恵子 (2016) . 小学校英語活動に関わる質問紙の活用方法 : 研究方法と統計分析 . ワークショップ . 小学校英語教育学会 研究推進委員会主催 . 立命館大学 . 招待講義 . 1月30日 .
- 12) 西田理恵子 (2016) . 英語学習者動機のメカニズム : 理論と実践を通して . 大阪大学大学院言語文化研究科主催 . 教員のための英語リフレッシュ講座 . 大阪大学大学院言語文化研究科
- 13) 西田理恵子 (2016) . 公立中学校2年生を対象とした言語運用能力と学習意欲 : 学習意欲減退と学習意欲再燃に焦点を置いて . 第6回 動機付け理論研究会 (関西) . 大阪大学大学院言語文化研究科 . 10月23日 .

- 14) 西田理恵子(2016) . 中学校 1 年生を対象としたリスニング能力、動機づけ、情意に関する縦断調査 . 動機づけ研究会 (関東) . 早稲田大学 . 招待講義 . 9 月 18 日 .
- 15) 西田理恵子 (2016) . 小学校外国語活動におけるプロジェクト型授業の試み～アクティブラーニングと内容重視型の授業実践～ . CLIL とアクティブラーニングの研究会 . 愛知大学名古屋キャンパス . 招待講義
- 16) Nishida, R. (2015) . Willingness to communicate and L2 ideal self in gender comparisons. the use of multiple group structural equation modeling in the Japanese EFL context. Paper presentation. The 13th Asia TEFL International Conference. Nanjing International Youth Cultural Center, Nanjing, China - November 6~8. Symposium.
- 17) Nishida, R. (2015) . A longitudinal analysis of listening abilities, motivation and affect among secondary school students in the Japanese EFL context. Hankoku University of Foreign Studies, Seoul, Korea. May 16, 2015.
- 18) 西田理恵子 (2015) . 小学校から中学校段階にかけての言語運用能力・動機付け・情意の変化に関する縦断調査 . 全国英語教育学会 . 熊本学園大学 . 8 月 22 日・23 日 .
- 19) 西田理恵子 (2015) . 林日出男氏・廣森友人氏と共同 . 小学校外国語活動における児童の動機付けと情意 : 研究と実践の視点から . 「外国語教育における動機付け研究の最前線」全国英語教育学会・小学校英語教育学会 第 4 回英語教育セミナー・シンポジウム . 熊本学園大学 . 招待講演 . 3 月 14 日 .
- 20) 西田理恵子 (2015) . 学習者動機と情意 : 教育的介入を通して . 大阪大学大学院言語文化研究科主催「教員のためのリフレッシュセミナー」 大阪大学大学院言語文化研究科 .
- 21) 西田理恵子 (2015) . 日本人英語学習者における言語・文化・情意 : 英語検定試験を用いて . 公益財団法人英語検定協会 . 東京 . 6 月 12 日 .

〔その他〕

ホームページ等

<https://rienishi.jimdo.com/>

1